

# 刑余の叔父

石川啄木

青空文庫



一年三百六十五日、投網打とあみうちの帰途かへりに岩鼻の崖から川中へ転げ  
 落ちて、したたか腰骨を痛めて三日寝た、その三日だけは、流石  
 に、盃を手にしなかつたさうなど不審がられた程の大酒呑、酒の  
 次には博奕ぼくちが所好すきで、血ちなまぐさ醒いい噂いづつに其名の出ぬ事はない。何日  
 誰が言つたともなく、高田源作は村一番の乱暴者と指されてゐた。  
 それが、私の唯一たつた人の叔父。  
 我々姉弟は、「源作叔父様おんつあん」と呼んだものである。母の肉身しんみ  
 の弟ではあつたが、顔に小皺の寄つた、痩せて背の高い母には毫すこし

も肖<sup>に</sup>た所がなく、背がずんぐりの、布袋<sup>ほてい</sup>の様な腹、膨<sup>はちき</sup>切れる程酒  
肥りがしてゐたから、どしりどしりと歩く態<sup>さま</sup>は、何時見ても強さ  
うであつた。扁<sup>ひらた</sup>い、膩<sup>あぶら</sup>ぎつた、赤黒い顔には、深く刻んだ縦皺が、  
真黒な眉と眉の間に一本。それが、顔<sup>いつたい</sup>全体を恐ろしくして見せ  
るけれども、笑ふ時は邪<sup>あどけ</sup>気ない小兒<sup>こども</sup>の様で、小さい眼を愈々小さ  
くして、さも面白相に肩<sup>ゆす</sup>を撼る。至つて軽口<sup>さば</sup>の、捌<sup>さば</sup>けた、竹を割  
つた様な氣象で、甚<sup>どんな</sup>人の前でも胡坐<sup>あぐら</sup>しかかいた事のない代り、  
又、甚 人に対しても牆<sup>しやうへき</sup>壁を設ける事をしない。  
少年<sup>こどもら</sup>等が好きで、時には、厚紙の軍<sup>しやつぽ</sup>帽やら、竹の軍<sup>サアベル</sup>刀板  
端<sup>ばし</sup>の村田銃、其頃流行<sup>はや</sup>つた赤い投<sup>なげ</sup>弾<sup>だま</sup>まで買つて呉れて、一隊  
の義勇兵の為に一日の暇<sup>つぶ</sup>を潰す事もあつた。気が向くと、年<sup>とし</sup>長<sup>かさ</sup>

なのを率<sup>つ</sup>れて、山狩、川狩。自分で梳<sup>す</sup>いた小鳥網から又<sup>さ</sup>手網投<sup>あみ</sup>網、河鱒<sup>かじかあみ</sup>網でも押板でも、其道の道具は皆揃<sup>す</sup>つてゐたもの。鮎<sup>あじ</sup>の時節が来れば、日に四十から五十位まで掛ける。三十以上掛ける様になれば名人なさうである。それが、皆、商売にやるのではなくて、酒の肴<sup>え</sup>を獲<sup>え</sup>る為なのだ。

妙なところに鋭い才があつて、勝負事には何にでも得意な人であつた。それに、野良仕事一つ為た事が無いけれど、三日に一度の喧嘩に、鍛えに鍛えた骨節が強くて、相撲、力試し、何でも一人前やる。就<sup>なかんづく</sup>中、将棋と腕相撲が公<sup>おもてむき</sup>然<sup>さ</sup>の自慢で、實際、誰にも負けなかつた。博奕は近郷での大関株、土地<sup>ところ</sup>よりも隣村に乾分<sup>こぶん</sup>が多かつたさうな。

不得手なのは攀きのぼり木に駈かけつくら競くら。あれだけは若者共に敵かなはないと言つてゐた。脚が短かい上に、肥つて、腹が出てゐる所せみ為なのである。

五間幅の往還、くわツくわと照る夏の日ひに、短く刈込んだ頭に帽子も冠らず、腹を前に突出して、懐ふところ手てで暢ゆつたり然と歩く。前下りに結んだ三尺がだらしなく、衣服きものの衽まへが披はだかつて、毛深からツい素脛つねが遠慮もなく現はれる。戸口に凭たれてゐる娘共には勿論の事、逢ふ人毎に此方から言葉ことばをかける。茫然ぼんやり立つてゐる小児こゝろでもあれば、背後うしろから窃そつと行つて、目隠めかくしをしたり、唐突いきなり抱上げて喫びつくり驚おどろさしたりして、快はやささうに笑つて行く。千日紅の花でも後手に持もつた、腰曲こしまりの老媪おばあでも来ると、

『婆さんは今日もお寺詣りか？』

『あいさ。暑い事ことたなす。』

『暑いとも、暑いとも。恁こんな日にお前めえみたいなのが臭い婆さんが行くと、如来様も昼寝が出来ねえで五月蠅うるさがるだあ。』

『エツへへ。源作さあ何日いつでも気楽で可ええでヤなあ。』

『俺讚めるな婆さん一人だ。死んだら極楽さ伴つれてつてやるべえ。』と言つた調子。

酔つた時でも別段の変わりはない。死んだ祖父に当る人によく似たと、母が時々言つたが、底無しの漏斗じやうご、一升二升では呼気いきが少し臭くなる位なもの。顔色が顔色だから、少し位の酒気は見えないといふ得もあつた。徹夜よどほし三人で一斗五升飲んだといふ翌あくる

朝あさでも、物言ひが些ちと舌蕩したたるく聞える許りで、拳動ものごしから歩き振りから、確然しつかりとしてゐた。一体私は、此叔父の蹣跚よろよろした千鳥足と、少しでも慌てた態さまを見た事がなかつた。も一つ、幾何酔つた時でも、唄を歌ふのを聞いた事がない。叔父は声が悪かつた。それが、怎して村一番の乱暴者あばれものかといふに、根が軽口の滑稽しやれに快く飲む方だつたけれど、誰かしら酔ひに乗じて小生意気な事でも言出すと、座しらが曝けるのを怒るのか、

『馬鹿野郎！ 行けい。』

と、突いきなり然林の中で野獣でも吼える様に怒鳴りつける。对手がそれで平伏へこたまれば可いが、さもなければ、盃なを擲なげて、唐突いきなり両腕を攫そとんで戸外へ引摺り出す。踏む、蹴る、下駄で敲く、泥溝どぶへ突つ

きのめ  
 仆す。制める人が無ければ、殺しかねまじき勢ひだ。滅多に負ける事がない。

それは、三日に一度必ずある。大抵夜の事だが、時とすると何日も何日も続く。又、自分が飲んでゐない時でも、喧嘩と聞けば直ぐ駆出して行つて、遮二無二中に飛込む。

喧嘩の帰途は屹度私の家へ寄る。顔に血の附いてる事もあれば、衣服が泥だらけになつてゐる事もあつた。『姉、姉、姉。』と戸外から叫んで来て、『俺ア今喧嘩して来た。うむ、姉、喧嘩が悪いか？ 悪いか？』と入つて来る。

母は、再かまたと顔顔をを擡しかめる。叔父は上あがりがまちがまちに突立つて、『悪いなら悪いと云へ。沢山うんと怒れ。汝うなの小言など屁でもねえ！』と言つ

て、『馬鹿野郎。』とか、『この源作さんに口一つ利いて見ろ。』とか、一人で怒鳴りながら出て行く。其度、姉や私等は密くつつき接合つて顫へたものだ。

『源作が酒と博奕を止めて呉れると喃なあ！』

と、父はよく言ふものであつた。『そして、少し家業に身を入れて呉れると可ええども。』と、母が何日いつでも附加へた。

私が、まだ遙ずつと稚なかつた頃、何か強情でも張つて泣く様な時には、

『それ、まだ源作叔父おんつあん様が酔つて来るぞ。』と、姉や母に嚇おどされたものである。

村に士族が三軒あつた。何れも旧南部藩の武家、さむらひ廢藩置県の  
大變遷、六十余州を一度に洗つた浮世の波のどさくさに、相前後  
して盛岡の城下から、このひやくしやうむら農村に逼塞したのだ。

其一軒は、ひがし東といつて、めつかち眇目の老人のつむじまがり頑固が村人の氣受  
に合はなかつた。おまけ剩に、働盛りの若主人が、十年近く労症をわづら煩つ  
た末に死んで了つたので、多くもなかつた所有地ももちち大方人手に渡  
り、仕方なしに、村の小兒相手の駄菓子店を開いたといふ仕末で、  
もう其頃——私の稚かつた頃——は、誰も士族扱ひをしなかつた。  
私は、其店に買ひに行く事を、堅く母から禁ぜられてゐたもので

ある。其理由は、かの眇目の老人が常に私の家に対して敵意を有つてるとか言ふので。

東の家に美しい年頃の娘があつた。お和歌さんと言つた様である。私が六歳位の時、愛宕神社の祭礼だつたか、盂蘭盆だつたか、何しろ仕事を休む日であつた。何気なしに裏の小屋の二階に上つて行くと、其お和歌さんと源作叔父が、藁の中に寝てゐた。お和歌さんは「呀ツ。」と言つて顔をかくした様に記憶えてゐる。私は目を円くして、梯子口から顔を出していると、叔父は平気で笑ひながら、「誰にも言ふな。」と言つて、お錢を呉れた。其翌日、私が一人裏伝ひの畑の中の路を歩いてると、お和歌さんが息をきらして追駈けて来て、五本だつたか十本だつたか、黒羊※

をどつさり呉れて行つた事がある。其それから以後といふもの、私はお和歌さんが好で、母には内ないしよ密ちよいちよいで一ちよいちよい寸ちよいちよい々々、東の店に痰たんきり切きり飴アルや氷糸へい糖とうを買かひに行つた。眇目の老人さへるなければ、お和歌さんは何時でも負けてくれたものだ。

残余あとの二軒は、叔父うちの家と私わたくしの家。

高田家と工藤家——私わたくしの家——とは、小身ではあつたが、南部初代の殿様が甲斐の国から三さん戸のへの城に移つた、其時からの家臣なさうで、随分古くから縁籍の關係があつた。嫁よめ婿むこの遣やり取とりも二度や三度でなかつたと言ふ。盛岡の城下を引ひきはら掃はらふ時も、両家で相談した上で、多少の所有地もちちのあつたのを幸ひ、此村に土着する事に決めたのださうな。私の母は高田家の総領娘であつた。

尤も、高田家の方が私の家よりも、少し格式が高かつたさうである。寝物語に色々な事を聞かされたものだが、時代が違ふので、私にはよく理解のみこめなかつた。高田家の三代許り以前まへの人が、藩でも有名な目附役で、何とかの際に非常な功績てがらをしたと言ふ事と、私の祖父おぢいさんが鉄砲の名人であつたと言ふ事だけは記憶おぼえてゐる。其祖父さんが殿様から貰つたといふ、今で謂つたら感状といつた様な巻物が、立派な桐の箱に入つて、刀箱と一緒に、奥座敷の押入に蔵つてあつた。

四人の同きやうだい胞、総領の母だけが女で、残余あとは皆男。長男も次男も、不ふしあはせ幸な事には皆二十五六で早世して、末ツ子の源作叔父が家督を継いだ。長男の嫁には私の父の妹が行つたのださうだ

が、其頃は盛岡の再縁先で五人の子供の母親になつてゐた。次男は体の弱い人だつたさうである。其嫁は隣村の神官の家から来たが、結婚して二年とも経たぬに、唾の女をんなのこ児を遺して、盲腸炎で死んだ。其時、嫁のお喜勢さん（と母が呼んでゐた。）は別段泣きもしなかつたと、私の母は妙に恨みを持つてゐたものである。事情はよく知らないが、源作叔父は其儘あによめ、嫂のお喜勢さんと夫いっし婦よになつた。お政といふ唾の児も、実は源作の種だらうといふ噂も聞いた事がある。

私の物心ついた頃、既に高田家に老としより人が無かつた。私の家にもなかつた。微かすかに記憶えてゐる所によれば、私が四歳よっつの年に祖お父ちいさんが死んで、狭くもない家一杯に村の人達が来た。赤や青や

金色銀色の紙で、花を拵へた人もあつたし、お菓子やら餅やら沢山貰つた。私は珍らしくて、嬉しくつて、人と人との間を縫つて、<sup>へや</sup>室から室と跳歩いたものだ。

道楽者の叔父は、飲んで、飲んで、田舎一般の勘定日なる盆と大晦日の度、<sup>かたつぱじ</sup>片端から田や畑を酒屋に書入れて了つた。残つた田畑は小作に貸して、馬も売つた。家の後の、目印になつてゐた大櫓まで切つて了つた。屋敷は荒れるが儘。屋根が漏つても繕はぬ。障子が破れても張換へない。叔父の事にしては、家が怎<sup>ど</sup>うならうと、妻子が甚<sup>どんななり</sup>服装をしようとして、其<sup>そんな</sup>事は従<sup>てんで</sup>頭念頭にない。自分一人、誰にも頭を下げず、言ひたい事を言ひ、為たい事をして、酒さへ飲めれば可<sup>よ</sup>かつたのであらう。

それに引代へて私の家は、両親共四十の坂を越した分別盛り、  
（叔父は三十位であつた。）父は小心な実直者で、酒は真ほんの交つきあ  
際ひに用ゆるだけ。四書五経を読んだ頭脳あたまだから、村の人の信頼  
が厚く、承諾はしなかつたが、村長になつて呉れと頼込まれた事  
も一度や二度ではなかつた。町村制の施行以後、村會議員には欠  
けた事がない。共有地の名儀人にも成つてゐた。田植時の水喧嘩、  
秣刈まぐさかり場の境界争ひ、豊年祭の世話役、面倒臭がりながらも顔を  
売つてゐた。余り壮健ぢやうけんでなく、痩せた、凶抜けて背の高い人で、  
一日として無為ぶゐに暮せない性質たちなのか、一時間と唯坐つては居な  
い。何も用のない時は、押入の中を掃除したり、寵愛の銀煙管を  
研みがいたりする。田植刈入に監督を怠らぬのみか、股引わらぢびきに草鞋穿

で、みづか躬ら田の水見にも廻れば、肥料こえつけの馬の手綱も執る。家にも二人まで下男がゐたし、隣近所の助勢すけても多いのだから、父は普あたりまへたりまへ通たのしみなら囲炉裏の横座に坐つてゐて可いのだけれど、「俺は稼ぐのが何よりの楽だ。」と言つて、露程も旦那風を吹かせた事がない。

随つて、工藤様といへば、村の顔役、三軒の士族のうちで、村方ほんとから真実に士族扱ひされたのは私の家一軒であつた。敢あへて富かねも有ちといふではないが、少許すこしは貸付もあつた様だし、田地と信用とは、増すとも減る事がない。穀蔵だてに広い二階立の物置小屋、――其階下したが土間になつてゐて、稲いね扱こきの日には、二十人近くの男あ女が口から出放題じようだんの戯談あやら唄やらで賑つたものだ。庭には

小さいながらも池があつて、赤い黒い、尺許りの鯉が十尾も居た。  
 家の前には、其頃村に唯一つの衡門かぶきもんが立つてゐた。叔父の家  
 のは、既に朽ちて了つたのである。

母と叔父とは、とを齡も十以上違つて居たし、青い面長と扁ひらたい赤  
 良顔がほ、鼻の恰好が稍肖ややにてゐた位のものである。背のすらり乎とした、

髪は少し赤かつたが、若い時は十人並には見えたらうと思はれる

容貌かほかたち。其頃もう小皺が額に寄つてゐて、持病の胃弱の所為せゐか、

膚はだは全然光沢がなかつた。繁忙いそがし続きの揚句は、屹度一日枕につ

いたものである。愚痴ぐちツほくて、内気で、苦勞性で、何事も無い日

でも心から笑ふといふ事は全たくなかつた。わけても源作叔父の

事に就いては、始しよつちゆう終しよつちゆう心を痛めてゐたもので、酔はぬ顔を見る

度、何日でも同じ様な繰事くりごとを列ならべては、フフンと叔父に鼻先で  
あしらはれてゐた。見す見す実家さとの零落して行くのを、奈何いかんとも  
する事の出来ない母の心になつて見たら、叔父の道楽どんなが甚どに辛  
く悲く思はれたか知れない。

恚こんな 両親の間に生れた、最初の二人は二人とも育たずに死んで、  
程経て生れた三番目が姉、十五六で、矢張内気たちな性質ではあつた  
が、娘だけに、母程陰気ではなかつた。姉の次に二度許り流産が  
続いたので、姉と私は十歳とを違ひ。

記憶は至つて臃おぼろげ氣である。が、私の両親は余り高田家を訪ふ事がなかつた様である。叔父だけは毎日の様に來た。叔母も余り家を出なかつた。

私は五歲六歲いつつむっの頃から、三日に一度か四日に一度、必ず母にひつ吩咐かつて、叔父の家に行つたものである。餅を搗いても、団子を拵へても、五目ごもくずし鮎しほびきを炊いても、母は必ず叔父の家へ分けて遣る事を忘れない。或時は裏畑から採れた瓜や茄子を持つて行つた。或時は塩鮎しほびきの切身を古新聞に包んで持つて行つた。又或時は、姉と二人で、夜になつてから、五升樽に味噌を入れて持つて行つた事もある。下男に遣つては外間が悪いと、母が思つたのであらう。

私は、叔父の家へ行くのが厭で厭で仕様がなかつた。叔父が居さへすれば何の事もないが、大抵は居ない。叔母といふ人は、今になつて考へて見ても随分好い感じのしない女で、尻の大きい、肥つた、夏時などは側へ寄ると臭氣のする程無精で、拳動から言葉から、半分眠つてる様な、小兒心にも齒痒い位鈍々してゐた。毛の多い、真黒な髪を無造作に束ねて、垢染みた衣服に細紐の檢束なき。野良稼ぎもしないから手は荒れてなかつたけれど、踵は嘗て洗つた事のない程黒い。私が入つて行くと、

『謙助（私の名）さんすか？』

と言つて、懈さうに炉辺から立つて来て、風呂敷包みを受取つて戸棚の前に行く。海苔巻でも持つて行くと、不取敢それの一つ

頬張つて、風呂敷と空のお重を私に返しながら、

『お有難う御座んすてなツす。』

と懶げに言ふのである。愛想一つ言ふでなく、笑顔さへ見せる事がなかつた。

顴骨ほほほねの高い、疲労の色を湛へた、大きい眼のどんよりとした

顔に、唇だけが際立つて紅かつた。其口が例なみはづ外れに大きくて、

欠呻あくびをする度に、鉄漿おはぐろの剥げた歯が醜い。私はつくづくと其顔

を見てみると、何といふ事もなく無気味になつて来て、怎うした

連想なのか、髑髏されかうべといふものは恁ごんなぢやなからうかと思つた

り、紅い口が今にも耳の根まで裂けて行きさうに見えたりして、

謂いひ知れぬ悪寒さむさに捉はれる事が間々あつた。

古い、暗い、大きい家、障子も襖も破れ放題、壁の落ちた所には、漆まつくろ黒に煤けた新聞紙を貼つてあつた。板敷にも畳にも、足触りの悪い程土埃ほこりがたまつてゐた。それも其筈で、此家の小児等は、近所の百姓の子供と一緒に跣足はだしで戸外そとを歩く事を、何とも思つてゐなかつたのだ。納戸の次の、八畳許りの室が寢室ねまになつてゐたが、夜昼蒲団を布いた儘、雨戸の開く事がない。妙な臭気が家中に漂うてゐた。一口に謂へば、叔父の家は夜と黄昏との家であつた。陰気な、不潔な、土埃の臭ひと黴の臭ひの充満みちみちたる家であつた。笑声はしやと噪いだ声の絶えて聞こえぬ、湿つた、唾の様な家であつた。

その唾の様な家に、唾の兎の時々発する奇声と、けたたましい

小児等の泣声と、それを口汚なく罵る叔母の声とが、折々響いた。小児は五人あつた。唾のお政は私より二歳年長、三番目一人を除いては皆女で、末ツ児は猶乳を飲んでゐた。乳飲児を抱へて、大きい乳房を二つとも披けて、叔母が居睡してゐる態を、私はよく見たものである。

五人の従同胞の中の唯一人の男児は、名を巡吉といつて、私より年少、顛顛に火傷の痕の大きい禿のある児であつたが、村の駐在所にゐた木下といふ巡査の種だとかいふので、叔父は故意と巡吉と命名けたのださうな。其巡吉は勿論、何の児も何の児も汚ない扮装をしてゐて、頸から手足から垢だらけ。私が行くと、毛虫の様な頭を振立て、接踵出て来て、何れも母親に肖た大

きい眼で、無作法に私を見ながら、鼻を擧めて笑ふ奴もあれば、「何物なに持つて来たべ？」と問ふ奴もある。お政だけは笑ひもせず物も言はなかつた。私は小児心にも、何だか自分の威厳を蹂躪ふみつけられる様な気がして、不快で不快で耐たまらなかつた。若しかして叔母に、遊んで行けとでも言はれると、不承不承に三分か五分、遊ぶ真似をして直ぐ遁にげて歸つたものだ。

私の母は、何時でも「那あんな無精な女もないもんだ。」と叔母を悪く言ひながら、それでも猶何に彼かにつけて世話する事を、怠らなかつた。或時は父に秘かくしてまでも実家さとの窮状を援けた。

時としては、従同胞共いとこが私の家へ遊びに来る。来るといつても、先づ門口へ来て一寸々々ちよいちよい内を覗きながら彷徨うろろしてゐるので、母

に声を懸けられて初めて入つて来る。其都度、私はかにかく左右と故障を拵へて一緒に遊ぶまいとする。母はあはれみ憐愍の色とかなしみ悲哀の影を眼一杯に湛へて、当惑気に私共の顔を等分にみおろ瞰下するのであつたが、結局矢張私のわがまま自由とほが徹つたものである。

叔父は滅多に家に居なかつた。飲酒家さけのみの癖で朝は早起であつたが、朝飯が済んでから一時間と家にゐる事はない。夜は遅くなつてから酔つて帰る。叔母や従同胞等いとこらは日が暮れて間もなく寝て了ふのだから、酔つた叔父は暗闇の中を手探り足探りに、己おのが臥床ふしどを見つけてもぐ潜り込むのだつたさうな。時としては何処かに泊つて家へは帰らぬ事もあつたと記憶おぼえてゐる。そして、日がな一日、塵程の屈托が無い様に、陽気に物を言ひ、元気に笑つて、誰に憚

る事もなく、酒を呑んで、喧嘩をして、勝つて、手当り次第に女を弄んで、平然けろりとしてゐた。叔父は、叔母や従同胞共いとこどもを愛してゐたとは思はれぬ。叔母や従同胞共いとこも亦、叔父を愛してはゐなかつた様である。さればといつて、家にゐる時の叔父は、矢張平然けろりとしたもので、別段苦い顔をしてるでもなかつた。

四

時として、叔父は三日も四日も、或は七日も八日も続いて、些ちつとも姿を見せぬ事があつた。其そんな事が、収穫とりいれ後から冬へかけて殊に多かつた様である。

飄然ふらりと歸つて来ると、屹度私に五十錢銀貨を一枚宛呉れたものである。叔父は私を愛してゐた。

のみならず  
加之、

其時は、何処から持つてくるものやら、鶏とか、雉子とか、鴨とか、珍らしい物を持つて来て、手づから料理して父と一緒に飲む。或年の冬、ちらちらと雪の降る日であつたが、叔父は例の如く三四日見えずにゐて、大きい雁を一羽重さうに背負つて来た事がある。父も私も台所の入口に出てみると、叔父は其雁をあがり上がまち框の板の上に下して、

『今朝隣村の鍛冶の倅の奴ア、これ二羽撃つて来たで、重おもがつけども一羽背負つて来たのせえ。』

と母に言つて、額の汗を拭いてゐた。

『大きな雁なほだ喃』

と父は驚いて、鳥の首を握つて持上げてみた。私の背の二倍程もある。怖るゝ触つて見ると、毛が雪に濡れてゐるので、気味悪く冷たかつた。横よこつばら腹のあたりに、一寸四方許り血が附いてゐたので、私は吃驚びつくりして手を引いた。鉄砲弾てっぽうだまの痕だと叔父は説明して、

『此方こつちにもある。これ。』と反対の脇の羽の下を見せると、成程其所そこにも血があつた。

『五刃弾かだもの。恚ぶつとほう貫通ぶつとほされでヤ人だつて直ぐ死んで了ふせえ。』

人だつて死ぬと聞いて、私は妙な身みぶるひ顫を感じた。

臆やがて父は廻状の様なものを書いて、下男に持たしてやると、役場からは禿頭の村長と睡さうな収入役、学校の太田先生も、あから 赧あから顔がほの富樫巡查も、みんなここにこ皆莞爾して遣つて来て、珍らしい雁の御馳走で、奥座敷の障子を開け放ち、酔興にも雪見の酒さかもり宴さかもりが始まつた。

其時も叔父は、私にお銭あしを呉れる事を忘れなかつた。母は例いづつもの如く不興な顔をして叔父を見てゐたが、あたり四周に人の居なくなつた時、

『源作や。』と小声で言つた。

『何せえ？』

『お前めえ、まだ善くねえ事ことして来たな？』と怨めしさうに見る。

『可<sup>え</sup>えでば、黙<sup>も</sup>つてるだあ。』

『そだつてお前、過<sup>こねえだ</sup>般も下田の千太爺<sup>おやぢどこ</sup>の宅で、巡査に踏<sup>ふんご</sup>込まれて四人許<sup>よつたりばか</sup>り捕縛<sup>おせえ</sup>られた風だし、俺<sup>おん</sup>ア真<sup>ほん</sup>に心配<sup>しんぺえ</sup>で……』

『莫<sup>ばか</sup>迦<sup>か</sup>な。』

『何<sup>なに</sup>ア莫迦<sup>ばか</sup>だつて？ 家の事<sup>べごと</sup>も構<sup>かま</sup>ねえで、毎日飲<sup>の</sup>んで博<sup>ぶ</sup>つて許<sup>ゆる</sup>りたら、高田の家<sup>たかたのいえ</sup>ア奈何<sup>どう</sup>なるだべサ。そして万<sup>ばん</sup>一<sup>いち</sup>捕縛<sup>おせえ</sup>られでもしたら……』

『何<sup>な</sup>有<sup>あ</sup>、姉<sup>あね</sup>や心配<sup>しんぺえ</sup>無<sup>な</sup>えでヤ。何<sup>ど</sup>の村<sup>むら</sup>さ行<sup>い</sup>つたて、俺<sup>おん</sup>の酒<sup>さけ</sup>呑<sup>の</sup>んでみねえ巡査一人<sup>いちにん</sup>だつて無<sup>な</sup>えがら。』

『そだつてお前<sup>めえ</sup>……』

『可<sup>え</sup>えでヤ。』と言<sup>い</sup>つた叔父<sup>おじい</sup>の声<sup>こゑ</sup>は稍<sup>しやう</sup>高<sup>たか</sup>かつた。『それよりや先<sup>まづ</sup>

づ鍋でも掛けたら可がべ。お静ツ子（私の姉）、徳利出せ、徳利出せ。俺や爛つけるだ。折角の雁汁に正宗、綺麗な白い手でお酌させたら、もつと好がべにナ。』と一人で陽気になつて、三升樽の口栓くちの抜けないのを、横さまに拳で擲つてゐた。

母は気が弱いので、既もう目尻を袖口で拭つて、何か独りぶつぶつで囁ささ※  
眩こぼしながら、それでも弟にいひつ伝つけられたなりに、大鍋をガチャ／＼させて棚から下してゐた。それを見ると私は、妙に母をあはれ愍あはむ様な気持になつて、若し那あんな事を叔父の顔を見る度に言つて、万一叔父が怒る様な事があつたら、母は奈何どうする積りだらうと、何だか母の思慮の足らないのが齒痒くて、それよりは叔父がか恚かうして来た時には、口先許りでも礼を言つて喜ばせて置いたら可からう、

などと早老<sup>ませ</sup>た事を考へてゐた。それと共に、母の小言などは屁<sup>へ</sup>とも思はぬ態度<sup>そぶり</sup>やら、赤黒い顔、強さうな肥つた体、巡査、鉄砲、雁の血、などが一緒になつて、何といふ事もなく叔父を畏<sup>おそ</sup>れる様な心地になつた。然しそれは、酒を喰<sup>くら</sup>ひ、博奕をうち、喧嘩をするから畏れるといふのではなく、其時の私には、世の中で源作叔父程豪<sup>えら</sup>い人がない様に思はれたのだ。土地<sup>ところ</sup>でこそ左程でもないが、隣村へでも行つたら、屹度衆人<sup>みんな</sup>が叔父の前へ来て頭を下げるだらう。巡査だつて然<sup>さ</sup>うに違ひない。時々持つて来る鶏や鴨は、其巡査が帰りの土産に呉れてよこしたのかも知れぬ。今朝だつて、鍛冶の倅といふ奴が、雁を二羽撃つて来た時、叔父が見て一羽売らないかと言ふと、「お前<sup>めえさま</sup>様ならタダで上げます。」と言つて、

怎<sup>ど</sup>うしてもお<sup>あし</sup>銭を請取らなかつただらう、などと、取<sup>とり</sup>留<sup>とめ</sup>もない事を考へて、畏<sup>おそ</sup>る畏<sup>おそ</sup>る叔父を見た。叔父は、内赤に塗つた大きい提<sup>ひさげ</sup>子に移した酒を、更に徳利に移しながら、莞<sup>にこつ</sup>爾いた眼<sup>めつき</sup>眸<sup>じつ</sup>で昵と徳利の口を噴<sup>み</sup>めてゐた。

## 五

巡吉の直ぐ下の妹（名前は忘れた。）が、五<sup>い</sup>歳<sup>っ</sup>許りで死んだ。三日許り病んで、夜明方に死んだので何病氣だつたか知らぬが、報<sup>しら</sup>知<sup>せ</sup>の来たのは、私がまだ起きないうちだつた。父は其日一日叔父の家に行つてゐた。夕方になつて、私も母に伴<sup>つ</sup>れられて行つた。

〔生前未発表・明治四十一年七月稿〕

（未完）

# 青空文庫情報

底本：「石川啄木全集 第三卷 小説」筑摩書房

1978（昭和53）年10月25日初版第1刷発行

1986（昭和61）年12月15日初版第6刷発行

※生前未発表、1908（明治41）年5～6月執筆のこの作品の本文を、底本は、市立函館図書館所蔵啄木自筆原稿によっています。

入力：林 幸雄

校正：川山隆

ファイル作成：

2008年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 刑余の叔父

石川啄木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>